

清藤 碌郎（せいどう・ろくろう）

1、プロフィール

詩人、評論家。「日本未来派」「花粉」「オルフェ」に詩作を発表。「オルフェ」の編集者を務め、5冊の詩集がある。一方、青森県郷土文学の研究評論に健筆をふるう。

<生没>

1926(大正 15)年 6 月 9 日 ～ 2019(令和元)年 6 月 16 日

<代表作>

詩集『花と終末』『還魂よ』『冬梅』

郷土文学研究評論『文壇資料津軽文士群』『福士幸次郎詩業と生涯』

<青森との関わり>

尾上町生まれ。郷土文学の研究評論を精力的に執筆、4冊の著書がある。

2、作家解説

詩人、評論家。大正 15(1926)年尾上町生まれ。地元の農学校在学のところ、芥川龍之介の「沼地」「トロツコ」により文学に目覚める。石川啄木、相馬御風、吉田絃二郎、島田清次郎ら自然主義、感傷的文学を読みはじめる。卒業後、代用教員を勤めるが、正式な教員資格取得のため昭和 20 年官立青森青年師範学校に進み昭和 23 年卒業、教員となる。弘前の「門文庫」に出入りし、一戸謙三、植木曜介、船水清を知る。さらに「北」詩人会に入り、高木恭造、北島一夫を知り詩作を始める。昭和 25 年法政大学に進み、小田切秀雄らの教えを受ける。学内の集会で野間宏、花田清輝、安部公房ら戦後派作家に接し眠れぬ夜を過ごす。この頃口語歌人鳴海要吉を訪ねる。詩誌「日本未来派」に入会。同人に池田克己、高見順、今官一らがいる。大学卒業後、教職につく。

昭和 30 年第一詩集『花と終末』を日本未来派の会から発行。昭和 32 年「花粉」創刊に加わる。藤原定、大江満雄、田中冬二、山室静、蔵原伸二郎らが同人。

「花粉」の他「詩学」「実在」等に詩やエッセイを発表。昭和 38 年、第二詩集『境涯』を実在叢書の1冊として出版。「花粉」(昭和 32～37・全 20 冊)改題再出 発誌「オルフエ」が昭和 38 年創刊、引き続き同人となる。昭和 44 年編集委員。詩の他に、中西梅花、大塚甲山、福士幸次郎ら異端詩人についてのエッセイを発表。昭和 44 年、「東奥詩壇」選者。同年、第三詩集『鞆韃』を一間舎より刊行。昭和 49 年、第四詩集『還魂よ』を自家版として刊行。昭和 50 年『青森県詩集』の資料編に「菊岡久利の遍歴と作品」「船水清の詩」を執筆。昭和 53 年「オルフエ」編集長となる。昭和 54 年、講談社から文壇資料シリーズの1冊『津軽文士群』を出版。昭和 56・57 年、「東奥日報」新年文芸の選者となる。昭和 59 年、青森県文化シリーズの1冊『ふるさとの詩と詩人』、昭和 62 年、青い樹社から第五詩集『冬海』、平成元年、北の街社から『福士幸次郎 詩業と生涯』、平成 12 年、北方新社から『異端と自由』をそれぞれ出版。詩と郷土文学研究評論に活躍。

3、資料紹介

○『福士 幸次郎 詩業と生涯』

図書

1990(平成元)年9月 20 日

195mm×135mm

日本近・現代詩史では先駆的で異色な詩人として認められ、位置づけられながら、郷土においてその存在感が薄れている。そこに不満と不安を感じ、太陽詩人・福士幸次郎の詩業と生涯にスポットをあてた唯一の研究評論。鋭利な詩人の批評眼が光る。北の街社刊。